

意味への道標 (2)

——E・パノフスキーの「美術学的基礎概念」構築とその指針——

小野崎 康 裕

キーワード：パノフスキー 藝術意思 美術学的基礎概念

要旨

前稿「意味への道標 (1) — E・パノフスキーの〈美術学的基礎概念〉構築とその指針」を継承しつつ、エルヴィン・パノフスキーによって構築された《美術学的基礎概念》にかかわる理論の解明に取り組む。その足場を固めるため、「美術学的」と共にこの語を構成する「基礎概念」という用語にスポットを当てる。考察の順序として、まずこの語の歴史を考察し、それを踏まえてパノフスキーが語に託した意味へと進む。その上で、前稿において獲得された「美術学的」の意味と合わせ、彼のいう「美術学的基礎概念」の全体的含意を明確化する。本稿では、十八世紀ドイツ哲学による「基礎概念」という概念そのものの枠組形成に注目し、この語にいかなる意味幅が与えられたかを探る。

一・C・「基礎概念」の意味

本論(1)で考察したように、「美術学的基礎概念」という用語を構成する「美術学的」には《解釈の作業概念として藝術意思にかかわる》という意味が託されていた。では、一方の「基礎概念」にはどのような意味が託されているか。パノフスキー自身はこれを解説していない。のみならず、後に考察するシュマルゾウやヴェルリンも、パノフスキーに先立ってこの語を用いながら、やはりみずから託した語義そのものを説明していない。「基礎概念」という語の意味は、自明であったかにさえ見える。しかし、この語の意味には或る〈幅〉もしくは〈射程〉が伏在している。そのため、いま名前を挙げた人々の間にさえずりに微妙な、それでいて決して無視することのできない意味のズレが見出される。この事

情により、自明と見られがちなこの語の意味に再検討の必要が生じる。「基礎概念」は本来いかなる意味をもち、どのような意味幅を秘めているか、そしてパノフスキーの「基礎概念」は意味幅のどこに座をもつか——こうした問題が問われなくてはならない。以下、パノフスキーが「基礎概念」という語に託した意味の解明に向かう。

あらかじめ、行論の略図を示しておこう。「基礎概念」という語は十八世紀前半の独語に現れる。⁽⁶⁶⁾そこから、この語は十八世紀ドイツ哲学による彫琢を受け、決定的な意味の枠組を獲得する。その後、十九世紀を経て二十世紀最初の四半世紀までの間に、この語は美術史・美術学を含む広範な学術領域へと普及し、パノフスキーによって採り入れられる。⁽⁶⁷⁾こうした経歴を踏まえ、以下ではまず十八世紀ドイツ哲学による「基礎概念」の意味彫琢を考察し、そこで確定された意味の枠組を捉える。前段に述べたこの語に潜む意味の幅も、これにより明らかになると思われる。さらに、同時代の辞典類などに即して十九世紀における語義を瞥見し、そこから二十世紀初頭の美術史・美術学に用いられたこの語の意味へと進む。その上で、これらの前史を踏まえながらパノフスキーにおける「基礎概念」の意味を探っていく。

1・C・1. 「基礎概念」の下地——ヴォルフの寄与——

「基礎概念」は Grundbegriff という独語の邦語訳である。原語の Grundbegriff は合成名詞であり、Grund と Begriff の二語によって構成される。すると、語を構成する Grund と Begriff の意味が多かれ少なかれ Grundbegriff に反映されることとなる。十八世紀ドイツ哲学における Grundbegriff には、この時代の哲学における Grund と Begriff の意味が反映される。したがって、この時代の哲学における Grundbegriff を捉えるには、その哲学における Grund と Begriff の意味をまず知っておかなければならない。語形の変遷については割愛し、行論の便宜を考慮して Begriff から探っていく。

(1・C・1・a) Begriff の意味

Begriff は「範囲」「区域」などを表す語として中古独語(十一世紀中頃～十四世紀中頃)に姿を現し、初期新高独語(十四世紀中頃～十七世紀中頃)において、さらに「理解」「認識」「理解力」「概念」なども表す語へと拡大する。⁽⁶⁸⁾十八世紀になると、意味の一角に留まっていた「概念」に光が当てられる。この世紀の初頭、クリステイアン・トマジウス(一六五五～一七二八)により、Begriff は明確に《概念的表象》を意味する語として用いられる。⁽⁶⁹⁾そしてその

すぐ後、クリステイアン・ヴォルフ (一六七九—一七五四) によりこの語に定義が与えられる。ヴォルフは、ラテン語名詞 «noio» (概念) に対応させつつ «Begriff» の語義を「概念」に限定した上で、これを「私たちの思考の内にある事物の……表象」と定義する。⁽⁷⁰⁾ これにより、「Begriff» は《概念》として、つまり《思考の内にある事物の表象》として確定されたのである。

ヴォルフが «Begriff» に与えたのは定義だけではない。「noio» に与えられていた概念分類ないし《段階》もまた、ヴォルフによってこの語に刻印される。ヴォルフは「概念」を、単一事象の概念——彼のラテン用語で「単独概念」(notio singularis) ——と複数の事象にかかわる「一般概念」(allgemeine Begriffe / notio universalis) とに分け、前の「単独概念」を——「太陽」のような単独固有の事象を含む——ただひとつの事象にかかわる概念とし、後の「一般概念」を「多くの事物に共通の」概念とする。⁽⁷¹⁾ ここにおいてすでに、《単独事象の概念から複数事象の概念へ》という段階が現れる。しかしそれに留まらず、「一般概念」には本格的な段階づけが与えられる。すなわち、単独事象との距離に応じて、まずそれに最も近い「事物の種 (Art) に関する概念」(例えば《犬》が与えられ、次いで《種》の共通特性に基づく《類 (Geschlechter) の概念》(例えば《動物》、そして最後に《類

の共通特性に基づく「最高類」(das höchste Geschlechte) の概念(例えば《実体》)という段階が、与えられるのである。⁽⁷²⁾ このように、《単独概念》↓《種概念》↓《類概念》↓《最高類概念》(あるいは「カテゴリー」ないし「範疇」という概念に関する段階が、ヴォルフによって「概念」としての «Begriff» に刻印される。

右のとおり、ヴォルフによって «Begriff» は《概念上の段階》を具えた「事物の表象」に確定され、哲学上の術語として整えられたのである。⁽⁷³⁾

(I・O・I・q) «Grund» の意味

では、もうひとつの «Grund» はどうか。古高独語(八世紀中頃—十一世紀中頃)に現れて「底」や「最奥」、「谷間」や「窪み」、「地面」などを表したこの語は、中高独語時代の神秘思想家によって「根拠」や「根源」といった意味にも用いられた。⁽⁷⁴⁾ 一七二〇年、前の語と同じくヴォルフによりこの語に定義が与えられる。中高独語から伝承された「根拠」や「根源」といった語義をにじませながら、ヴォルフは «Grund» に「それにより或るもの(なせ存在するか)が理解可能になるもの」——つまり《或るもの存在理由》ないし《或るもの存在を説明する根拠》——という定義を与えている。

そればかりではない。ヴォルフはさらに、ひとつの《基準》に基づくと「Grund」の分類を意図し、これを具体的にすすめている。ものの存在を説明する「Grund」は、説明される当ものの「外」にある場合と「内」にある場合とに分けられる。これに注目したヴォルフは、《事物の「外」にあるか「内」にあるか》を基準に据え、これに基づいて「Grund」を《外的根拠》と《内的根拠》に分類するのである。次にこれを具体的に述べよう。

簡明にいえば、《外的根拠》は（Aに属しながらAとは異なるBの説明根拠となる契機）を指す。例えば、庭の植物の「急速な成長」が「大気の暖かさ」によるとすれば、植物に生じた「成長」の「根拠」は「暖かさ」となる。つまり、A（大気）に属す契機（暖かさ）が別のB（植物の成長）を説明する外的根拠とされるのである。これに対し、《内的根拠》は（Aに属しながら同じAに属す別契機の説明根拠となる契機）を指す。例として〈時計〉が挙げられる。時計は部品の組み合わせで成り立つが、「いかなる部品によって組み立てられているか」は「時計の働き」と「そこから得られる」利益によって決定される。いうまでもなく、時計の「働き」は（一定速度における針の回転）であり、「利益」は〈時刻の表示〉である。この場合、A（時計）に属す契機（働きと利益）が、Aに属す別の契機（部品とその組み合わせ）を説明する内的

根拠となるわけである。

右記には、「Grundbegriff」へ継承される事項が含まれている。《外的根拠》の含まれるAを、ヴォルフは「原因」(Ursache)と呼ぶ。それにより、外的根拠は「原因」に包摂され同化される。また一方、同じAの内で働く《内的根拠》を、ヴォルフは「事物について考えうる第一のもの」とし、これを「本質」(Wesen)と呼ぶ。ここに「原因」と「本質」という「Grund」の《分類》が立てられ、これが「Grundbegriff」へ継承されるのである。それだけではない。後の「本質」を、ヴォルフは「それにより」事物が〈種〉(Art)に限定される「根拠と見る。先ほどの例に当てれば、《働きと利益》によって或る事物が〈時計〉という「種」に限定される、ということである。事物を〈種〉に限定するこうした根拠は、前記のように事物の共通特性である。すなわちヴォルフは、「本質」としての《内的根拠》を種の共通特性と捉え、概念段階上の〈種概念〉にこれを位置づけたのである。「Grund」そのものの《分類》と並び、根拠の位置を概念段階の上に定めるこうした《位置づけ》もまた、ひとつの型となつて「Grundbegriff」へ引き継がれる。

右のように「Grund」も、ヴォルフによって「原因」と「本質」を併せ含む《説明根拠》に確定される。同時に、或る基準——彼の場合《事物の外と内》——に則してこれを分類し、

概念段階上に位置づけるという伝統もまた、ヴォルフによって築かれたのである。

以上、「Grundbegriff」の構成要素である「Grund」と「Begriff」を探り、この二語の哲学的語義がヴォルフによって確立されることを見た。ヴォルフ自身に「基礎概念」の語は見出されないものの、彼の所論は哲学的「基礎概念」の下地を形成する。

一・C・2. 十八世紀ドイツ哲学における「基礎概念」——

クルージウスからカントへ——

視野の限り、ドイツ哲学に「Grundbegriff」の語が現れるのは一七四〇年代である。ヴォルフを下地としながら、この時期、少なくともこの語はクルージウスとカントに現れている。のみならず、両者ともに「基礎概念」の彫琢に積極的に取り組む。とりわけカントによって彫琢された語義は、後代にひとつの規範を形成する。ここではそうした彫琢を、時系列にしたがいクルージウスからカントへたどる。この両者の異同、またヴォルフとの異同を見通しやすくするため、(1)「基礎概念」とは何か、を確かめた上で、ヴォルフによって拓かれた二つの問題、すなわち(2)それはどのように分類されるか、(3)概念段階上のどこに位置づけられるか、という三つの問題にしばらくながら見ることにする。

(一・C・2・a) クルージウスにおける「基礎概念」

クリスティアン・アウグスト・クルージウス(一七二五—七五)は、人間の認識に関する考察の中で「基礎概念」の語を用いる。彼の「基礎概念」を見るには、彼の立てた概念の分類を知っておく必要がある。クルージウスは概念を種々に分類するが、「基礎概念」につながるのは「限定概念」に関する分類である。行をあらためて述べよう。

多くの「概念」には、対象を限定して他のものから区分する働きがある。「三角形」という概念は、さまざまな図形のひとつを限定し、他の図形から区分する働きをする。クルージウスは、限定によって「或るものと他すべてのものの区分」を実現するこうした概念を「限定概念」(Definition)と呼ぶ⁽⁸⁴⁾。ただし、限定される対象は事物に限られない。「実在的事物」と並び、「言葉の意味」も限定の対象でありえる。そこでこれに基づき、彼は「限定概念」を〈言葉の意味〉にかかわる「唯名的(nominal)」なそれと〈事物〉にかかわる「実在的(real)」なそれとに分類する⁽⁸⁵⁾。とはいえ、クルージウスにとっても本論にとっても、重要なのは後の「実在的限定概念」である。この概念の説明には「犬」や「林檎」といった例だけを挙げておけば足りるだろう。注目すべきは、この概念もまた二種に分類され、そのひとつが「基礎概念」に直結することである。

「実在的限定概念」は、《認識上の序列》にしたがって「第一 (erst)」のそれと「後続的」(geschlosssen / ferner) なそれとに分類される。後者が前者によって根拠づけられる概念を指すのに対し、前の「第一」[限定]概念は「その証明に他の事物限定概念を前提せず、我々の認識をかえりみて第一に存在しうる」⁽⁸⁶⁾概念を指す。それはまた「その他の根拠の根拠」、つまり《第一根拠》の概念でもある。「第一概念」の例には「光」が挙げられる。視覚による事物認識を成立させる《第一根拠》は光であるという理由で、クルージウスは視覚認識の「第一概念」を《光》の概念とする。⁽⁸⁷⁾「基礎概念」(Grundbegriffe / notions primae)とは、こうした「第一概念」であり、《第一根拠》を限定する概念にほかならない。認識の成立において第一に位置する「第一概念」を、彼はひとまず「基礎概念」と呼ぶ。⁽⁸⁸⁾それゆえ、ここで(1)に暫定的な結論を与えるとすれば、クルージウスの「基礎概念」は《認識の成立において第一に位置しつつ第一根拠となる限定的概念》——一言にいえば《認識を成り立たせる第一概念》——と定式化されよう。

では、基礎概念の分類に関する(2)はどうか。この問いに伴い、いま述べた「基礎概念」の定式は拡張される。

ヴォルフと同じくクルージウスも、基礎概念の表す《第一根拠》を二種に分類する。ただし、《事物》に即して根拠を

《事物の外と内》に区分したヴォルフとは異なり、事物の《認識》を軸とするクルージウスは《思考力の外と内》に根拠を分類する。彼は、思考力の「外」にある根拠を「実在的根拠」(Realgrund)と呼び、「或る事物が我々の思考の外で……生み出される」根拠とする。⁽⁸⁹⁾同時に彼は、思考力の「内」にある根拠を「観念的根拠」(Idealgrund)と呼び、「或る事物に関する認識が思考の内に確固として生み出される」根拠とする。⁽⁹⁰⁾この区分を念頭に各々の具体的内容を見ると、「実在的根拠」の内容として筆頭に挙げられるのは事物に生成変化を引き起こす「動因」(wirkende Ursache)である。当然ながら、第一根拠としての「動因」は《第一動因》となる。先ほど例とされた《光》は、視覚的認識を引き起こす《第一動因》だったのである。このように、実在的根拠としての基礎概念は《第一動因》に帰着する。一方、「観念的根拠」の場合、これが意味するのは事物の「本質」(Wesen)である。⁽⁹¹⁾動因の場合とは異なって「本質」はそれ自体概念であるから、第一のそれといえども——概念段階の違いはあったとしても——概念である点に何ら変わりはない。結果、観念的根拠としての基礎概念は概念としての《本質》に帰着する。かくして、クルージウスの「基礎概念」は、最終的に《第一動因》と《本質》に分類されるのである。⁽⁹²⁾

(3)の問題に移る。上述のとおり、ヴォルフは内的根拠

を概念段階中の「種」概念に位置づけた。これに対してクルー
ジウスは、「基礎概念」を概念段階のさらなる上位に位置づ
け、「類 (Genera) および種差 (Propria)」とする。⁹⁵これに
は若干の説明が必要である。

ヴォルフに関連して述べたとおり、事物の《共通特性》(例
えば「理性的」) によって《種》概念(「人間」) が成立し、
種の《共通特性》(例えば「可感的」) によって《類》概念(「動
物」) が成立する。そこには、概念の適用範囲——以下「外
延」と記——に応じて(より狭い下位(種概念) からより広
い上位(類概念) へ) という段階が成立した。ただし、この
段階は反転可能である。《動物》という類概念の外延には「人
間」も「犬」その他も含まれる。それらを再び《種》に区分
しようとする場合、区分の基準になるのは《種》それぞれの
《共通特性》である。「動物」という類的外延に《理性的》と
いう区分基準を立てれば、他すべての動物から「人間」とい
う外延が区分され、「人間」の種概念が成立する。前の段落
最後にいわれた「種差」は、(上位(類) から下位(種) へ)
という過程で区分の基準に用いられる《共通特性》を意味す
る。これによって知られるように、(下位↓上位) というい
わば概念段階の上り階段に立って内的根拠を「種」概念とし
たヴォルフに対し、クルージウスは(上位↓下位) という下
りを視野に入れ、基礎概念をさらに上位の「類」概念とした

上で、種別化の——例えば彼の述べた「光」を(日光) や(月
光) に種別化する場合の——基準となる「種差」を加えたも
のと見られる。かくして、クルージウスは基礎概念を「類お
よび種差」としたのである。

以上、クルージウスによって用いられた「基礎概念」の内
容を探った。

(一・c・2・b) カントにおける「基礎概念」

哲学史上に名高いイマヌエル・カント(一七二四—
一八〇四) は、「基礎概念」の語義に考察を加えると共に、
この語をしばしば著作の中に用いた。ただし「基礎概念」そ
のものをめぐる考察は、著作よりむしろ彼の遺した覚書——
慣例にしたがい「レフレクシオン」と記——の中に見出
される。⁹⁶「基礎概念」に関するレフレクシオンは、著名
な『純粹理性批判』——以下「第一批判」と記——より前の
一七六二年頃から七一年頃の中に集中している。とはいえこ
の間の思索は、第一批判以後も明らかに「基礎概念」という
語の土台であり続ける。これを念頭に置きながら、レフレク
シオンと著作とを併せて「基礎概念」に関するカントの思
索を探っていく。

まず、(一) に即してカントの「基礎概念」観を確かめる。
あらかじめ結論を述べれば、彼の「基礎概念」は、多くの点

でクルージウスに一致しながらも、さらなる整備をほどこしたものといえる。一七六二―三年頃のレフレクションから必要な箇所を引いておこう。⁽⁹⁷⁾

我々のあらゆる認識において、いくつかの認識が他の認識の基礎とならなければならない。数多くの概念の基礎には、それとは別の概念が存在する。「……」ごく身近な「時計」という概念の基礎には、「時間」・「動き」・「計測」といった概念がある。「友情」の語を口にする人は、「愛情」・「誠実」などの概念を足場とする。「……」こうした基礎概念は《基盤的概念》と呼ぶことができる。「……」別の基礎概念を前提することのない基礎概念は《始原的概念》(第一基礎概念)と呼ばれる。

ここでカントは、「基礎概念」を一般的に他の概念の足場となる「基盤的概念」(notiones fundamentales)としながら、それと同時に、もはや他の足場を前提しない究極の基礎概念として「始原的概念」(notiones primitivae)を語っている。これによつてまず知られるのは、カントの「基盤的」と「始原的」が、クルージウスによる「根拠」と「第一」という基礎概念の特徴に一致することである。カントの「基盤的概念」にクルージウスの「實在的根拠」(動因)は含まれていない

ものの、それ以外について両者は基本的に一致する。⁽⁹⁸⁾とはいえ、寸分たがわず同一ということではなく、そこには明確な違いも認められる。カントの「基盤的概念」は、クルージウスのように「第一概念」に限られるのではなく、第二、第三の「後統的」諸根拠を併せ含んだ概念である。カントは《時計》に《動き》や《計測》など複数の基礎概念を挙げているが、これはその明らかな証左といえよう。カントの「基礎概念」は、クルージウスのそれより拡大された概念と捉えられる。一方、「第一概念」としての基礎概念は、「第一基礎概念」(erste Grundbegriffe)という新たな名称を与えられ、拡大された「基礎概念」の部分概念とされる。もとよりそれは、《基礎概念の中の基礎概念》として中心に位置するであろう。とはいえ、拡大された「基礎概念」の一部であることに変わりはない。こうした整備により、クルージウスにおいて必ずしも明瞭でなかった「後統的」諸根拠の位置が明確にされ、第一根拠との関係も整えられる。本論はここに、カント独自の「基礎概念」観を見届ける。カントの「基礎概念」は、《第一》から「後統的」までを含めた根拠を表す概念《と定式化されるだろう。

次に基礎概念の分類に関する(2)はどうか。この分類を見るには、クルージウスの唱えた「實在的根拠」に対するカントの見解をあらかじめ知っておく必要がある。

上述のとおりクルージウスは、人間の思考の外に「実在的根拠」(例えば「気温の上昇」と「根拠づけられた実在的事象」(例えば「植物の芽吹き」)の存在を認めた。それはつまり、私たちの思考と無関係な因果関係の存在を認めるということである。しかしカントは、思考と無関係に想定された因果関係に正面から異議を唱える。カントによれば、気温の上昇に続いて植物は芽をふく。ふたつの事象の、そうした「固定的随伴」⁽⁹⁸⁾は確かに見られる。しかし「随伴」を乗り越え、「気温の上昇」と「芽吹き」を必然的に結び付けている目に見える紐帯は存在しない。あるいはまた、太陽が石を照らすと石は温まる。⁽⁹⁹⁾この場合、「太陽光」は根拠、「石の温度」は根拠づけられた事象となる。しかし、「太陽光」と「石の温度」を必然的に結び付ける紐帯はやはり見られない。確実に見出されるのは、「太陽光」と「石の温度」の「随伴」だけである。これにより、カントは「根拠」という概念は客観的な概念ではない⁽¹⁰⁰⁾と結論づける。彼によれば、「根拠—根拠づけられるもの」という関係は、或るaとそれに先立つbを「必然的且つ「因果的な」規則にしたがって」結合する意識の働きによるのであり、思考と無関係に存在しえるものではないのである⁽¹⁰¹⁾。

右の理由により、「《思考力の内と外》というクルージウスの分類はカントによって排される。「根拠—根拠づけられる

もの」という結合は思考する意識の領域に一元化され、それと同時に、根拠を表す「基礎概念」もこの領域に一元化される。カントの出発点はここにある。基礎概念を思考の領域に一元化した彼は、新たに《経験的—理性的》という基準を立て、これに基づいて基礎概念を新たな二種に分類する。すなわち、「経験的 (empirisch) 基礎概念」と「理性的 (rational) 基礎概念」という分類である。ただし、基礎概念に関するこの分類は、「概念そのもの」に関するカント特有の分類を下地としている。それゆえ、まずカントによる概念の分類を確かめ、次にそれに基づいて基礎概念の分類を見届けることにする。

カントは概念を「経験的 (empirisch) 概念」と「純粹 (rein) 概念」とに分類する。前者は「感覚の含まれた」概念、後者は「感覚の混在しない」概念を意味する。⁽¹⁰²⁾ふたつの概念は、事物の表象にかかわる点で一致するが、起源についてはまったく異なる。「経験的」概念は、表象の「質料」(Materie)となる「感覚」(Empfindung)を直接の起源としながら、さかのぼれば、感覚そのものの因となる感性の「触発」(Affektion)を最終的な起源とする。⁽¹⁰³⁾概念の成立を見ると、この概念は、感覚を含む諸表象から共通の因子を抽象することによって成立する。これに対し、「純粹」概念は表象の「形式」(Form)を直接の起源とする。「形式」は、「そのおかげで現象」=

感覚を質料とする表象」の多様が或る関係の内に秩序づけられうるもの」——つまり質料の多様を関係づけてひとつの表象にまとめ上げる要因——を意味する。純粹概念は、さしあたり、こうした表象の形式（感覚的表象の秩序）を起源とする。しかしさかのほれば、こうした表象の形式それ自体も「意識に刻みこまれたある種の規則」(lex quaedam menti iuris)——つまり表象をまとめ上げる意識機能の規則性——に起因している。それゆえ、純粹概念の起源をたどれば、最終的に《意識の規則》に到達する。ここには、表象を触発に基づく受容とするばかりでなく、併せてそこに主観意識の《能動的寄与》を見据えるカント特有の見方がある。また、概念の成立に目を向けると、純粹概念は複数表象からの「抽象」によるものではなく、表象の形式を通してその因である《意識の規則》を探ることによって得られる。カントによる概念の分類は、ひとまず以上のとおりである。

右記にはさらに事例が必要である。まず、感覚に起源をもつ「経験的」概念である。或る種の花の表象は〈赤色〉の感覚と〈強い芳香〉の感覚を質料とする。同種複数の表象に共通するこれらの感覚性質を抽象し、私たちは《薔薇》という概念を形成する。カントのいう、これが「経験的」概念である。一方、「純粹」概念の例には感覚の《所在位置》を挙げることができる。〈赤色〉の感覚を含んだ薔薇の表象を、私

は自分の《外》にあるものとして意識する。言い換えれば、私の立つ《ここ》を基準とした空間座標上の《そこ》に、私は薔薇を意識する。さらに私は、薔薇とは異なる百合の表象を同じ座標上の《あちら》に意識する。このように、私は外的感覚を、私自身の《ここ》を基準とした空間座標上に位置づけて意識するのであり、例外はありえない。いかなる外的感覚にも空間的秩序を与えるこうした《所在位置》は、カントのいう「形式」に含まれる。それは表象の形式のひとつであり、さかのほれば「意識に刻みこまれた規則」のひとつ——具体的には「対象を知覚する知覚の仕方に具わる純粹形式」——なのである。

ここに見た「経験的概念」と「純粹概念」の分類は、カントによる「基礎概念」の分類に下地とされる。すでに述べたように、彼は基礎概念を「経験的」基礎概念と「理性的」基礎概念とに分類する。名称のとおり前者は経験的概念に属す基礎概念であり、後者は純粹概念に属す基礎概念である。後者の「理性的」は、「理性に具わる普遍的な諸源泉から汲みとられた」という意味をもつ。それゆえ、この語は《意識の規則》に帰着する「純粹」の類義語にほかならず、結果、「理性的基礎概念」は「純粹概念」に含められることになるのである。第一批判には、この基礎概念を実際に「純粹基礎概念」と記した箇所も見出される。この理由により、以下ではこれ

を「理性的」純粹基礎概念」と記していく。次に、分類されたふたつの基礎概念について述べる。

一七六九年のレフレクシオンによると、経験的基礎概念は「感覚を質料とした」表象そのもの」に基づくゆえに「経験的」と呼ばれ、「質料としての諸源泉」を表すがゆえに「基礎概念」と呼ばれる。一言にいえば、それは抽象による経験的諸概念の中にある他の源泉となる概念であり、学問の領域でいえば、ひとつの領域の源泉あるいは根拠となる概念である。例としては、カントによって「心理学の基礎概念」とされた「自我」(Ich)を挙げることができる。経験的基礎概念は、一七六九年以来、第一批判の後までそのまま保持されていく。それに対し、理性的「純粹基礎概念は」形式の諸概念」とされ、《意識の規則》の中でも特に「思惟の諸規則」を表す概念とされる。いうまでもなく、「基礎概念」と呼ばれる理由は形式が表象を成立させる根拠だからである。こうした理性的「純粹基礎概念にこの時期のカントが当てた項目内容は、同じ年に記された別のレフレクシオンの中に見出される。カントはこの基礎概念を、私の「外なる対象」と「内なるもの」の両面に考えていた。まず、外なる対象には「空間、時間、運動」という基礎概念が述べられる。この内、「空間」と「時間」は感性の形式として——同時に「純粹直観」として——第一批判へと継承維持される。三番目の「運動」

は、翌七十年の『可感界と可想界の形式と原理』(K.Dms)で姿を消し、その後、基礎概念としては現れない。一方、内なるものの基礎概念には《思考》・《感情》・《欲求》にわたって種々の項目が述べられる。この内、《感情》と《欲求》は基礎概念としてその後維持されず、《思考》についてもいまだ《意識の規則》そのものを具体化するには至っていない。その具体化には、第一批判の「純粹悟性概念」を俟たなければならぬ。とはいえ、すでにこの時期、「経験的基礎概念」と「理性的」純粹基礎概念」という分類が、カントによって確立されていたことは事実である。

いま述べた基礎概念の分類を踏まえて、それでは(3)についてはどうか。すなわち、ふたつの基礎概念はカントによって概念段階上のどこに位置づけられたか。

まず経験的基礎概念である。前述のとおり、感覚を含む表象から抽象によって形成される経験的概念の中にあつて、それは他の源泉ないし根拠となる概念を意味する。この基礎概念は、概念段階上の「種」概念ないし「類」概念に位置する。先ほどの心理学における「自我」を振り返っても、それは〈幼児の自我〉あるいは〈成人の自我〉という下位概念に対して「類」となり、〈動物の自我〉という上位概念に対して「種」となる。このように、経験的な基礎概念は概念段階上の「種」ないし「類」に位置するのであり、カントにおいてもこれに

何ら変わりはない。それゆえ、経験的基礎概念に関する限り、カントはヴォルフやクルージウスと同じ平面上に立っていたといえよう。決定的な違いは理性的⇨純粹基礎概念に現れる。

理性的⇨純粹基礎概念は、「意識に刻みこまれた規則」の中で「思惟の諸規則」を表す概念となる。少し前に述べたとおり、その内容が具体化されるのは第一批判においてである。この書中、感性の与える表象を思惟する能力は「悟性」(Verstand)と呼ばれる。したがって、理性的⇨純粹基礎概念は《悟性の諸規則》を表す概念となり、それゆえ「純粹悟性概念」(reine Verstandesbegriffe)と呼ばれる⁽¹²⁾。では、この概念が表す《悟性の諸規則》はどこに求められるのか。それは、表象を思惟する思惟の形態に求められる。ただし、思惟の核心は《判断》にある。《表象を思惟する》とは《表象について判断し判定すること》にほかならない。それゆえカントは、思惟の能力である悟性を「判断する能力」とする。結果、《悟性の諸規則》は表象をめぐる《判断の諸形態》に求められることになる。では《判断の形態》とは何か。判断は、複数の表象・概念をひとつに統一する働きとされる。⁽¹³⁾《これは蓄薇である》という判断は《これ》なる表象を《蓄薇》という概念の内に統一する働きであり、《蓄薇は花である》という判断は《蓄薇》なる種概念を《花》という類概念の内に統一する働きである。このように、判断は表象・概念を統一する働

きを意味する。そしてカントは、統一される側の表象・概念が千差万別でも、統一する判断の働きには一定数の規則的形態が具わる、と考える。つまり、判断の働きの中に表象・概念をまとめる一定数の《規則的な型》が存在すると見るのである。例えば「単称」(《このA》はB)、「特称」(《いくつかのA》はB)、「全称」(《すべてのA》はB)といった、それは《型》を意味する。例を当てれば、「善人」の存在を具体的に特定する場合、その判断は必ず、《この人》だけが善人か、《何人か》が善人か、《すべての人》が善人か、という範囲上の《型》を具えており、判断はこの《型》に則して下される以外ない、というのである。《悟性の諸規則》とは、判断にこうした論理的な《型》を生む因にほかならない。それゆえ、《悟性の諸規則》は判断における《型》の根底に求められる。手がかりとなる判断の《型》は、先行する形式論理学において、すでに《判断の諸形式》として考察されていた。⁽¹⁴⁾かくして、そうした判断形式の根底に、カントは《悟性の諸規則》すなわち「純粹悟性概念」を——本論の主題に立っていえば《理性的⇨純粹基礎概念》を——見出していくのである。⁽¹⁵⁾

さて、右の理路にしたがって捉えられた「純粹悟性概念」を、カントは第一批判の中で明確に「基礎概念」と呼ぶ。いうまでもなく、それは《理性的⇨純粹》基礎概念を意味している。のみならず、アリストテレスを踏まえながら、カント

はこれを「カテゴリー」に位置づける。⁽¹⁷⁾ ヴォルフの箇所述べたとおり、論理学上の「カテゴリー」はあらゆる概念の最上位に立つ「最高類概念」(範疇)を意味している。カントのカテゴリーは判断意識に具わる規則であるから、判断を受けるどのような表象・概念もその下に包摂されなくてはならない。この理由により、「純粹悟性概念」すなわち「理性的」純粹基礎概念はあらゆる概念を包摂するカテゴリーに位置づけられるのである。ヴォルフにもクルージウスにも明らかな一線を画しながら、「基礎概念」≡「カテゴリー」という位置づけがカントによってはじめて確立されたのである。

本稿では、十八世紀ドイツ哲学による「基礎概念」という概念そのものの彫琢までを見た。ヴォルフによって整えられた下地の上に、——カントの言葉を借りれば——「経験的基礎概念」がクルージウスによって確立される。さらに、これを下地としながら、カントにより「経験的基礎概念」——「理性的」純粹基礎概念」という区分が樹立される。それに伴い、「経験的」基礎概念は——ヴォルフやクルージウスと同じく——経験的概念として「種」ないし「類」に位置づけられ、「理性的」純粹基礎概念は判断意識に具わる規則として「カテゴリー」に位置づけられる。これにより、「経験的」——「理性的」純粹」という二層の枠組が基礎概念に設けられ、前者

を「種」ないし「類」、後者を「カテゴリー」とする枠組も確立されたのである。⁽¹⁸⁾ 本稿の冒頭に述べた「基礎概念」に伏在する(意味の幅)は、まさしくここに出現する。カントにおいて確立されたこのような枠組と意味幅は、十九世紀以降の「基礎概念」を考える際に指標となるであろう。

(名誉教授 哲学・美学)

略記号(承前)

- Crusius 1747 = Christian August Crusius, *Weg zur Gewißheit und Zuverlässigkeit der menschlichen Erkenntnis*, Leipzig: J. F. Gleditsch, 1747 (rpt. Hildesheim: Georg Olms, 1965).
- Heinsoech 1956 = Heinz Heinsoech, *Studien zur Philosophie Immanuel Kants: Metaphysische Ursprünge und ontologische Grundlagen*, Köln: Köhler Universitäts-Verlag, 1956.
- Heinsoech 1970 = H. Heinsoech, *Studien zur Philosophie Immanuel Kant II: Methodenbegriffe der Erfahrungswissenschaften und Gegenständlichkeiten spekulativer Weltkonzeption (Kantstudien, Ergänzungshefte, 100)*, Bonn: H. Bouvier u. Co., 1970.
- K-Dms = Kant, *De mundi sensibilibus aequè intelligibilibus forma et principis*, Berlin: Georg Reimer.
- K-V = Kant, *Kritik der reinen Vernunft*.
- L-PhS = G. W. Leibniz, *Die philosophischen Schriften*, Ed. C. I. Gerhardt, 7 vols, 1875-90 (rpt. Olms, 1978).
- Piur 1903 = Paür Piur, *Studien zur sprachlichen Würdigung Christian*

Wolffs, Halle: Eh. Karras, 1903.

Wolf 1713 = Christian Wolff. *Vernünftige Gedanken von den Kräften des menschlichen Verstandes* [.....] Halle, 1713 (rpt. Olms, 1965).

Wolf 1720 = Ch. Wolff. *Vernünftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen* [.....] Halle, 1720 (Nachdruck, Halle, 1751 = rpt. Olms, 1997).

Wolf 1724 = Ch. Wolff. *Vernünftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen* [.....] : *Anderer Theil*. Frankfurt am Main, 1724 (Nachdruck, Frankfurt, 1740 = rpt. Olms, 1983).

Wolf 1728 = Ch. Wolff. *Philosophia rationalis sive Logica*. Marburg, 1728 (Nachdruck, Leipzig, 1740 = rpt. Olms, 1983).

註

- (66) 一六九一年の独語辞典 (K. Snelser, *Der deutschen Sprache Stamm-baum und Fortwachs*; Nürnberg, 1691, rpt. 1968, col. 699-700) に録された接頭辞付「Begriff」の中に「の」語は含まれず、一七三四年の独語辞典 (C. E. Steinbach, *Vollständiges deutsches Wörterbuch*, I, Breslau, 1734, rpt. 1973, pp. 649-50) に「の」語は現れない。ただしグリム辞典 (IV-1-6, 1935, col. 758) によれば、次に挙げる一七三四年の神学書には「の」語が見出される。F. Ch. Oettinger, *Vester und schriftmäßiger Grund einiger theologischen Haupt-Wahrheiten*, Frankfurt, 1734, p. 5.
 (67) 「の」の主な学術領域への「の」語の普及は、グリム辞典 (IV-1-6, col. 757-58) に収録された用例を通じて知られる。
 (68) Cf. G. Benecke / W. Müller, *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*, I, Leipzig, 1854 (rpt. Hildesheim: G. Olms, 1963), p. 572; M. Lexer,

Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, I, Leipzig, 1872 (Stuttgart: S. Hirzel, 1979), col. 147; Ch. Baufeld, *Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch*, Tübingen: Max Niemeyer, 1996, p. 25; U. Goebel /

O. Reichmann, *Frühneuhochdeutsches Wörterbuch*, III, Berlin / New York: Walter de Gruyter, 2002, col. 672-5.

- (69) 一七〇九年の著書で、トマスは「父としての神と云ふ概念にして且つ表象」を語ると共に、「私たちは自然法を「……」正しい人の律法と云ふ概念と見なす」と記している。Christian Thomasius, *Grundlehren des Natur- und Völkerrechts*, Halle; Renger, 1709 (rpt. G. Olms, 2003), p. 101 (§ 42); 163 (§ 4). 54. トマスに云って「概念」の語義が前面に出された点は次にも述べられる。Pur 1903, pp. 86-7.

- (70) Wolf 1713, p. 123 (§ 4). ラテン語に於ける同様の定義は Wolf 1728 (p. 127, § 34) に見られる。また、「ヴォルフが「Begriff」を「notio」の対応語とする点には次を参照。Wolf 1720, Register.

- (71) 「単独概念」¹⁴ Wolf 1713 (p. 123, § 4) と Wolf 1728 (p. 127, § 34)。「一般概念」¹⁵ Wolf 1713 (p. 138, § 29) と Wolf 1728 (pp. 137-8, § 54) に述べられる。「の」分類は「ヴォルフの師ライプニッツによる「notio」の分類に一致する。ライプニッツは、『ライプツィヒ学報』に掲載された「認識、真理、観念についての省察」(一六八四年)の中で、「notio」を「何か一輪の花あるいは何か一匹の動物」(aliquis Floris aut animalis) に関する概念と「数」・「大きさ」・「形」のよくなる複数の知覚に共通する概念」(notiones pluribus sensibus communes, ut numeri, magnitudinis, figurae) とに分類している。Leibniz, «Meditationes de Cognitione, Veritate et Ideis», in:

- L-Phs, IV, p. 422; 423. ヴォルフは「の分類を」Begriff「に転写した」と見なされる。
- (72) Wolff 1724, pp. 115-20 (§ 53). 広く知られてくるように、「《概念》・《類概念》・《最高類概念》の段階は「アリストテレスの「種」(γένος)」「類」(γένος)」「カテゴリー」(κατηγορία)「 χ 」かのほり」。 Cf. Aristotle, *Categories*, 2b7-12; *Analytics posteriorum*, 83b16.
- (73) *Begriff「がヴォルフによって哲学用語とされた」とは次に明記される。 Piur 1903, p. 87; J. Hoffmeister, *Wörterbuch der philosophischen Begriffe*, 2 ed. Hamburg: Felix Meiner, 1955, p. 107.
- (74) Cf. O. Schade, *Altdcutsches Wörterbuch*, I, Halle: Waisenhaus, 1872, p. 354; Lexer, *op. cit.* [本稿前註 (68)] col. 1102; K. Bendszeit, Art. Grund, in: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, III, Basel/Stuttgart: Schwabe & Co., 1974, col. 902. 「根拠」・「根源」あるいはほぼ同義の「根柢」となった意味は、例えばマイスター・エックハルト(一二六〇年頃〜一二三七年)の『教導講和』(Die rede der underscheidung) に用いられた *grunt「に見られる」。 Cf. J. Quint ed., *Meister Eckharts Traktate (Meister Eckhart: Die deutschen und lateinischen Werke: Die deutschen Werke*, V, Stuttgart: W. Kohlhammer, 1963, p. 199; 297. 「の語は」テキストに添えられたクヴィントの現代独語訳 (p. 508; 535) においても《土台となるもの》という意味の *Grund「とされ」二種類の邦語訳でも「根拠」・「根源」・「根柢」と訳されている。植田兼義訳「教導対話」、『キリスト教神秘主義著作集 6・エックハルト』(教文館、一九八九年) 所収、二八二および三三三頁、川崎幸夫訳「教導講和」、『エックハルト論述集』(創文社、一九九一年) 所収、八九および一五九頁。
- (75) Wolff 1720, p. 15 (§ 29).
- (76) Cf. Wolff 1720, pp. 17-8 (§ 31). 「の箇所において、ヴォルフは *Grund「が」事物の内にも事物の外にも」ありえることを明記している。この着想は「ライプニッツの「外的根拠」(external reason)と「内的根拠」(internal reason; raisons internes)にまったく一致しており、ライプニッツを源泉にするものと考えられる。 Cf. *Sreitschriften zwischen Leibniz und Clarke, in: L-Phs, VII, p. 374; 408. ヴォルフは「の《ライプニッツとクラークの往復書簡》に直接言及しており (Wolff 1720, p. 17, § 30)」「彼がそこから着想を得た」ことはおよそ確実である。「この点を顧慮して、本論でも「外的根拠」と「内的根拠」の語をライプニッツから借りる。」
- (77) Cf. Wolff 1720, p. 15 (§ 29). この箇所では「ヴォルフは『外的根拠』を次のように説明する。「事物 A が或る項を内包し、その項により、B のなぜ存在するか」が理解可能である場合、……A の内に見出しえる項は B の「外的」根拠と呼ばれる。」
- (78) Cf. Wolff 1720, pp. 15-6 (§ 29).
- (79) Cf. Wolff 1720, p. 18 (§ 32). 『内的根拠』をヴォルフはこう説明する。「この事物の内、いくつかの項が互いに区別される場合、それらのもとにあるただひとつの項が、それ以外の諸項はなぜ当の事物に帰属するか」の根拠を含むものでなければならぬ。『内的根拠』とは「この「ただひとつの項」をいうのにはかならない。」
- (80) Wolff 1713, p. 147 (§ 48).
- (81) Wolff 1720, p. 15 (§ 29).
- (82) Wolff 1720, p. 19 (§ 33); *ibid* (§ 34)
- (83) Wolff 1720, p. 19 (§ 33).

- (84) 「限定概念」の原語は「Definition」であるから、「限定」あるいは「定義」と訳せば済むようにも見える。しかし、クルージウスは「Definition」を「或るものと他すべてのものとの区別がそれによって可能となる…概念」(Crusius 1747, pp. 62-3, § 37)と定義している。これを顧慮し、「概念」であることを明示すべく、本論では「Definition」に「限定概念」の訳語を与える。
- (85) Crusius 1747, p. 63 (§ 37). 「唯名的限定概念」の例としては「四角い円」を挙げることもできるだろう。「四角い円」は、言葉の範囲ではその語義を確かに限定する。しかしこの概念により、言葉を越えて何らかの事物が限定されることはない。「四角い円」なるものが事物として実在しないからである。
- (86) Crusius 1747, p. 63 (§ 37).
- (87) Crusius 1747, p. 865 (§ 482).
- (88) Crusius 1747, p. 865 (§ 482).
- (89) Crusius 1747, p. 865 (§ 482); p. 866 (§ 482).
- (90) Crusius 1747, p. 255 (§ 140).
- (91) Crusius 1747, p. 255 (§ 140).
- (92) Cf. Crusius 1747, p. 260 (§ 142). クルージウスは「本質」を「或る事物に恒常的に帰属する全てのものの総括的概念」(Crusius 1747, p. 313, § 163)と説明する。「本質」の例として「例えは薬品の『調合法』のよんちんちんの『ひりり方』(Erzeugungssart)」、あるいは時計における〈時の表示〉とごうた「目的」、また時計の〈構造〉のような「目的に不可欠な機構」などが挙げられる。 Cf. Crusius 1747, p. 871 (§ 485); p. 872 (§ 486).
- (93) Cf. Crusius 1747, p. 887 (§ 495).
- (94) この段落のはじめに両者の違いを述べたが、クルージウスの「動因」はヴォルフの「原因」に、前者の「本質」は後者の「本質」に、それぞれ一致する。このように、クルージウスにはヴォルフに由来すると見られる一致も認められる。
- (95) Crusius 1747, p. 845 (§ 471).
- (96) 「基礎概念」に関するレフレクシオンは、現在、アカデミー版カント全集 (KdG) 第十七巻 (一九二六年) にまとめられている。本論はこれをテキストとし、成立年代もこれにしたがう。註記に際し、「Ref」の略記号と共にアカデミー版全集のテキスト番号を記す。これと同じく、カントからの引用はアカデミー版全集をテキストとし、その頁を記す。ただし慣例にしたがい、『純粹理性批判』(Kv) については第一版 (一七八一年) をA、第二版 (一七八七年) をBと表記してそれぞれの頁を記す。
- (97) Ref. 3709.
- (98) 本論で扱った一七四七年の書を含め、カントはクルージウスの諸著書に通じていた。それゆえ、この一致も偶然とは見えない。クルージウスに対するカントの直接的な言及は次に見られる。KdG, I, p. 393, 396, 397, 398-9, 405, 412; KdG, II, p. 54, 55, 76, 77, 169, 293-5, 342. また、クルージウスからカントへの影響を論じた基本的研究には次がある。Anton Marquardt, *Kant und Crusius: Ein Beitrag zum richtigen Verständnis der crusiatischen Philosophie*, Kiel: Lipsius & Tischer, 1885; Max Wundt, *Kant als Metaphysiker*, Stuttgart: Enke, 1924; Heinz Heimsoeth, «Metaphysik und Kritik bei Chr. A. Crusius: Ein Beitrag zur ontologischen Vorgeschichte der Kritik der reinen Vernunft im 18. Jahrhundert», in: Heimsoeth 1956, pp. 125-88.
- (99) Ref. 3972.
- (100) 「太陽光」と「石の温度」の事例は次に示す。Kant, *Prolegomena*

意味への道標 (2)

- zu einer jeden künftigen Metaphysik, §20, n., Kgs, IV, p. 301.
- (10) Ref. 3972.
- (102) この段落全体は K.V, A198=B243 — A202=B247 に基づいており、引用は A202=B247 にする。なお、この段落に述べた論の背景には、D・ヒュームの懐疑論の見解を克服しようとするカントの意図が存在する。この点はカント理解に重要であるが、立ち入るゆとりは本稿になく。
- (103) Ref. 3927. このレフレクシオンは一七六九年のものである。
- (104) K.V, A50=B74.
- (105) K.V, A68=B93. 「感覚」をめぐるカントの理論は重層的である。そこには、色や味などの「感覚の性質」と「実在的なもの」(das Reale) もしくは「超越論的対象」(transzendentaler Gegenstand) が含まれる。 Cf. K.V, A175-6=B217; A538=B566 — A539=B567. ただし、本論ではこの点に立ち入らない。
- (106) K.V, A20=B34.
- (107) K.Dms, Kgs, II, p. 393.
- (108) Cf. K.Dms, § 8, Kgs, II, p. 395; K.V, A32=B47.
- (109) Cf. K.V, B70, n.
- (110) Cf. K.V, A23=B38.
- (111) K.V, A42=B60. ここに述べた「知覚の仕方に見わる純粹形式」には、まさに「産出的構想力」(produktive Einbildungskraft) と「純粹統覚」(reine Apperzeption) による総合的統一が語られる。ただし、これについてもくわしく述べるゆとりはない。
- (112) 基礎概念の分類を考えていた時期、カントはすでに「経験的」—「純粹」の概念分類に到達しており、基礎概念の分類に当たってこれを前提とすることができた。「経験的」—「純粹」の概念分類は、一七六九年とされる複数のレフレクシオンに見出さ
- れらる。 Cf. Ref. 3957; 3958; 3961.
- (113) K.V, A836=B864 — A837=B865.
- (114) K.V, A171=B213.
- (115) Ref. 3988.
- (116) K.V, A684=B712.
- (117) Ref. 3988.
- (118) Ref. 3927.
- (119) Ref. 3927. 「内なるもの」に述べられた理性的＝純粹基礎概念は次の三種である。すなわち、(A) 時間を形式とする「直接的表象」とそれにかかわる《思考》の諸形態、(B) 「快」・「不快」を含んだ「感情」その他、(C) 「欲求」などである。
- (120) 「快」・「不快」および「欲求」は、第一批判において「経験的な起源をもつ」ものに分類され、理性的＝純粹基礎概念からは明確に除外される。 Cf. K.V, A15=B29.
- (121) K.V, A66=B91 et al.
- (122) K.V, A69=B94.
- (123) K.V, A69=B94.
- (124) 形式論理学で論じられていた判断の諸形式を、カントは、それぞれ三つの項から成る四グループに分類し、次のように一覧化する。一、判断の量(全称的／特称的／单称的)、二、「判断の」質(肯定的／否定的／無限的)、三、「判断の」関係(定言的／仮言的／選言的)、四、「判断の」様相(蓋然的／実然的)。「主張的」／必然的「論証的」、以上の四グループである。 Cf. K.V, A70=B95. また、下地をつくった形式論理学者の名をカントは挙げていないが、G・フリードリヒ・マイアー (George Friedrich Meier) はきわめて重要な一人と見られる。ケーニヒスベルク大学における「論理学」の講義で、カントはマイアー

の『論理学抄本』をテキストに用いた。(この書はアカデミー版カント全集・第十六巻に写真版の形で収められている。)そこに述べられた「判断の量」と「判断の質」はカントとまったく同一の内容をもち、カントが「関係」の下に並列させた仮言的判断と選言的判断もやはり並列されている。また、「様相」に挙げられた必然的判断と蓋然的判断(マイアーでは限定的判断)は、仮言的判断に重ねて述べられる。こうした相即より見て、マイアーが下地にあったことは疑いえない。 Cf. Meier: *Ausgang aus der Vernunftlehre*, Halle: J. J. Gebauer, 1752, § 294; § 297-8; § 301; § 305-8; § 309.

(125) 判断形式から導き出された「純粹悟性概念」は次のとおりである。一. 量(単一性/数多性/総体性)、二. 質(実在性/否定性/制限性)、三. 関係(内属性と自存性/原因性と依存性/相互性)、四. 様相(可能性と不可能性/現存在と非存在/必然性と偶然性)。 Cf. KrV, A80=B106. また、カントによつて述べられた《判断形式から純粹悟性概念へ》という順序を離れて、純粹悟性概念は実際には前批判期から独自の思索によつて蓄積され、最終的に判断形式との照応を規準に選定されたとする見解が、現在では広く見られる。複数にわたるレフレクシオンにかんがみて筆者もまたこの見解を支持するが、本論でくわしく述べることはできない。この見解に立つ基本的研究のみを挙げておく。 Heimsoeth, »Christian Wolffs Ontologie und die Prinzipienforschung I. Kants: Ein Beitrag zur Geschichte der Kategorienlehre«, in: Heimsoeth 1956, pp. 1-92; Idem, »Zur Herkunft und Entwicklung von Kants Kategorientafel«, in: Heimsoeth 1970, pp. 109-32.

(126) KrV, A81=B107.

(127) KrV, A81=B107. ここに述べる「カテゴリー」は、あくまでも判断意識に具わる規則としての「純粹」カテゴリーである。カントによるカテゴリー論の核心は、この純粹カテゴリーが構想力を介して《図式化されたカテゴリー》へと転じ、直観の場において働くところにこそある。しかし、ここでその論に立ち入ることはできない。

(128) カントによつて確立されたこの枠組は、グリム辞典 (WLG, col. 757-6) に分類された「基礎概念」の意味 1 と 2 に対応する。また、すでに十八世紀、「経験的基礎概念」には学問領域に縛られないいわば「ラフ」な使われ方が見られた。これについては同辞典 (col. 758) の意味 3 と 4 に用例が収録されている。なお、グリム辞典における 1 と 4 の意味配置は成立の時系列に即すものではない。採られているのは「哲学」→「他の学問領域」→「学問領域外」→「哲学に近接」という配置法である。したがって、時系列より見れば意味の配置はまったく別になる。